

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 8



2012 冬

目次

各駅停車	名木田純子	28
鴻八幡宮	長尾京子	26
余震なほ	富阪宏己	24
ひねり餅	津崎敬恵	22
秋から冬へ	谷口利子	20
春	高城登代	18
初紅葉	角南房子	16
芒原	桜本滋子	14
時の過ぎゆく	小六誠一郎	12
旅に拾ふ・秋(一)	梅田光憲	10
花	植田桂之	8
故郷(思い出)	井上悦男	6
牡丹の	石井宏幸	4
ぶらりと	浅野純子	2

山風	信里由美子	30
道	蓮岡健美	32
瑜伽の古道	與田武彦	34
色の一つに	米元ひとみ	36
寒暮	渡辺牛二	38
心の隣人	富阪宏己	40
俳句の眼、カメラの眼	桜本滋子	43
岡山市民の文芸	石井宏幸	45
編集後記	渡辺牛二	46

ぶらりと

浅野純子

はなよめと名づけし桃はどこ嫁ぐ

田植時じじ追ふ孫の黄カッパ

うたた寝の夢をひき裂き夕立くる

六時半子らが飛び出す夏休み

久々の雨とは言へぬ野分かな

こぼれ咲く萩につられて落柿舎へ

嵯峨野路は静かに秋を迎へをり

雨に耐へ黄金に光る稲いとし

金木犀香る小道は舟着き場

一入かもみぢ色づき千入森

牡丹の

石井宏幸

冷やかに零れて星の屑となる

この星の闇が蝕み冬の月

葉牡丹の渦に整ひたる日差

鴨の声尖りて水の暮れにけり

振り返る時寒林の過去となる

火の熾るごとくに椿揺れはじむ

路地に入るより白壁の余寒あり

瑕瑾なき日輪を抱き春の水

松蟬の遠く鳴きやむ日向かな

牡丹の奢りのどこか崩れたる

故郷（思い出）

井上悦男

三歳の夏ガリバーのごと父帰る
叱られて放り出されて夏の月
髪洗ふこんなに小さき父の背と
父母ねむる由加の山々雲は秋

水切りの石のあと追ふやんまかな
秋の川竿水音をはなれけり
自転車に秋満載の母がくる
稲刈つて大地の色を取り返す
稜線に消えゆく雲や秋さびし
日の落ちて径は花野となりにけり

花

植田桂之

夕暮れの和むひととき花菖蒲

紫陽花や土に従ふ花の色

梔子の艶に崩れて匂ひけり

空と海開け放たれて梅雨明くる

夏の日や風を感じる曲り角

炎昼のものみな白く光りけり

廃線の錆びしレールや稲の花

青空に三色加へ秋桜

風ありて黄落を行く人となる

千丈の岩壁の裾冬紅葉

旅に拾ふ…秋（一） 梅田光憲

朝寒のプラットホーム顔揃ふ

一水の音より萩の道となる

鳳凰堂深く沈めて水澄めり

秋日射す等間隔の無双窓

べにばなてふ部屋にただく菊脛

秋風の暮れてゆきたる関の跡

直角に折れる回廊秋の風

奥入瀬や冬へ加速の水の色

カルストの白極まれり草紅葉

旅しゆく刈田となつてゐる車窓

時の過ぎゆく 小六誠一郎

風撫づる毎に深まる麦の秋

早苗田の明るさ吉備の宮までも

ブナの森抜け満天に夏の星

流れ行く昼寝の時間島の寺

風やつと動いて処暑の風となる

豆飯のにほひ裏木戸暮れ初むる

一村を秋雲の影覆ひけり

秋冷や心やすらぎある日差

晩秋の音なき音の流れけり

あをあをと掛稲の上の空となる

芒原

桜本滋子

芒原静かに時の流れゆく

一列に薄の丈を分けて行く

風になり頬ずりしたくなる芒

誰彼の消えたる芒原の謎

歳月の池薄野にしてしまひ

万燈の灯を待つ人等芒原

落日の光の中の芒原

月の秋下駄カタコトと露天風呂

普段とは違ふ横顔零餘子汁

風やさし師も遊びしや芒原

初紅葉

角南房子

花木僅ひと日の色をしぼりけり

さざ波の銀鱗となり鯢跳ぬる

秋蟬のとぎれてはまた繋ぐ声

ちちろ鳴く闇深ければ深きほど

かがみ見る野に竜胆の濃かりけり

町川の日の斑をつつく秋の魚

草の戸を夜毎たづねし鉦叩

よるべなき秋蝶庭を離れざる

野路ゆけば風の高さに咲く紫苑

ちらちらと木洩れ日ほどの初紅葉

春

高城登代

瀬戸内の穏やかな春有難き

春浅し遅れのバスの県境

去勢され猫も参加の早春賦

山に入り録画の一步より初音

春めく日小声の騒ぐ町医院

島の橋霞を入りて出でにけり

蜺舟一畑線の湖の宿

高層のキー打つ窓に花びら来

枝揺らし小手毬の花遊びける

花は葉に山は優しき色ならむ

秋から冬へ

谷口利子

鏡台に來し爪ほどの秋の蝶

灯を消して一枚となる虫の闇

紅葉山よりの眺めの紅葉山

裏返る声や黄落しきりなり

黄落に空のほつれてしまひけり

奈良小春跳びゆく鹿の列なせり

金色の銀杏へ大仏殿の風

それとなく浜に來てゐる小春の日

影踏みて遊びし昔路地小春

裸木に裸木の影いのち充つ

ひねり餅

津崎敬恵

杜氏等の法被姿の御慶かな

酒蔵に休日はなし三が日

杜氏等の旧正月の餅をつく

新米を捧げて杜氏蔵入す

ひねり餅入れて杜氏の七日粥

父祖よりの大火鉢据ゑ杜氏部屋

蔵神に新酒造りの祝詞あぐ

杜氏等の寒さ讃へて醪つく

大桶に耳あて息をきく新酒

酒蔵の夜食に熱き冬至粥

余震なほ

富阪宏己

涅槃図を掲げし寺も吞まれけり
荒梅雨に涌くとも魚の群るるとも
潮満ちて花栗の香の濡るるほど
路上へとしたたる汗を踏みてきし

香炷きて涼しく人を待たれをり
何告げに來たるか海を飛ぶ揚羽
人影の灼けてゆくなり石畳
余震なほ夏潮の紺深めつつ
瓦礫積む残暑を積んでゆく如く
秋天の深きに闇を見てゐたり

鴻八幡宮

長尾京子

提灯をゆらし宵々祭かな

笛の音の少しはづれし秋祭

笹挿して髪を飾るも秋祭

浦々にしやぎり響かせ村祭

幼な子に紅ちよんとさす秋祭

掛声と走り抜けたる浦祭

梶棒の下手な父ちゃん秋祭

その中に篠笛一つ秋祭

松明にだんじり浮ぶ宮の森

闇深く秋の祭の終りけり

各駅停車

名木田純子

コート着て大東京に迷ひ込む

安曇野の春光わかつ道祖神

涛高き能登金剛の岩つばめ

飛驒の夜やつららがつらら生みにけり

ことごとく三河湾向き懸大根

初時雨吉野の夜を包み込む

草紅葉熊野古道の王子跡

虫時雨六甲の闇深くせり

舞子浜松の影より後の月

放牛に阿蘇の裾野の霧霽るる

山風

信里由美子

晩秋の山ひとつづつ影抱く

朴落葉空をはるかに置き忘れ

奈落抜け空忘れゆく朴落葉

朴落葉風の梯子を舞ひ落ちぬ

天よりの落し物かも朴落葉

朴落葉飛驒の大地の色となる

せせらぎの底に色増す散紅葉

山風の不意に華やぐ散紅葉

石庭の静寂深めし紅葉冷

冬ざれの風の続べゆく山河かな

道

蓮岡健美

潔く塩を振るなり桜鯛

花菖蒲百の揺らげる佳き日かな

朝まだき山杜鵑何処より

黒南風や船音踏みつ磴登る

栗の花溢れ流るる如きかな

汗の物みな裏返り脱ぎてあり

白桃の一氣に皮の剥けにけり

痛き程夏の光でありにけり

しばらくは大樹の下の蟬時雨

炎天の果てまで続く白き道

瑜伽の古道

與田武彦

大鳥居田の口湊瀬戸の秋

鯰跳ねて昔賑はひ暮の秋

空家には柚の木色づき誰を待つ

瑜伽山のどんぐり拾ふ峠道

秋深く願成坂に息をつく

絶景の天下茶屋跡竹の春

秋深し猪垣目立つ瑜伽の山

太助茶屋つはの花咲き一休み

瑜伽の寺さくら紅葉に鐘の音

このみちはいのちがつづくゆがのあき

色の一つに 米元ひとみ

木陰てふ小さな秋へ入りけり
靴ひもを松虫草に結ひなほす
野の花にいろ落としては秋の蝶
牧場に動かざる牛霧速し

高原の風となりゆく狭霧かな
色鳥の雑木のいろを移りをり
この山の色の一つに白芒
雨あとの青を自在に秋の雲
黄落や一本道の堂々と
赤き実に残る雨つぶ秋惜しむ

寒暮

渡辺牛二

家出猫戻らず三日春の雪

車椅子押す病院の初花に

春の堰マイナスイオン溢らしむ

旅かばん箆笥の上に黴びにけり

なんとまあ玄関先に蛇の衣

手を上ぐるだけのあいさつ朝涼し

飼主も犬も摺足油照

八朔や父のくせ字の農日誌

去年よりコスモス増えし父の墓

躓けば犬が振向く寒暮かな

心の隣人

富阪宏己

俳句は挨拶と言うから
存問の文学と言うから
日々
生まれ出づる句を
聞いてくれる人が欲しい
日々
生まれ出づる句を
聞かせてくれる人が欲しい
できることなら
私の句を素敵と言ってくれる人がいい
できることなら
私もその人の句を

素敵と思えた方がいい
光となって
枝を離れる小鳥の一瞬に驚く
そんな心を失くさぬように
生きていくために
足が丈夫なあいだは
あちこち歩きまわり
もう
一歩も歩けなくなったら
便りを送ろう
今日できた俳句を！
そして待とう
その人の返事を
その人の俳句を！

郵便ポストへ
手紙を届けてくれる
夫や妻や
息子や娘や
隣近所の親しい人や
だあれも居なくなったら
一人ぼっちになってしまったら
そう
パソコンや携帯電話のメールをつかおう
ベッドから
ベッドへ語りかけるように
世界の
端から端まで
心の声が届くから

その日のために
素敵な挨拶ができるようになりたい
なんの変化もない
無愛想な時間の流れる中でも
可笑しがったり
哀しがったり
窓辺の日差しの機嫌に
おどおどしたり
はしゃいだり
そんな心を育ててゆけたら
句会で
一句抜けた二句抜けたと
くだらないことに
一喜一憂しながら

そんな心を育ててゆけたら

良寛のように
賢治のように

欲もなく
打算もなく

光を捉える
魔術師になれたら
心の隣人と生きてゆける

そんな人が欲しい
この世に一人でもいい
そりゃあ
大勢がいいに決まってるけれど



俳句の眼、カメラの眼

桜本滋子

吟行、句会には俳句の醍醐味の一つである。
吟行地に着いて何か「これ」という物を見つけれ
と、言葉を探し、今感じたことを自分らしい表現
で紡いでいく。

そしてカメラは、写真も、ビデオも撮るが、や
はり何か見つけるところから始まる。

心の動く所に焦点を当てて撮る。

また、カメラの構図を決めて構え、そこに人や、
物が入ってくるのを待ち、作品を構成する。

俳句も一か所に留まって、一句を仕上げてい
く。

最近そんな趣味が、相互に作用しているように感
じることがある。
それは俳句が、カメラやビデオ編集に役だってい

るように思う。

ビデオの三十分から一時間の映像を三分から五分
の作品にまとめるとき、

どんどんカットしていく作業は、推敲そのもの
だ。

逆に俳句に役に立っているかどうかは、定かでは
ない。

写真の撮影旅行は、二か所くらいに絞ってゆつ
くり写すので、思う存分撮ることができる。

神事などは、一時間以上前から三脚を置いて待つ
ていたりする。そんな時、冷たい雨の中でも、
ちよつと頭を俳句モードに切り換えて、作句した
りする。

俳句作品、俳句画像、俳句入りのビデオ作品な
ど、どれも今まで生きてきた証だ。

もう今は見られない風景も、カメラや言葉で記録
していたことに気がつくことがある。

そして、それらに共通するのは、心の眼ではないだろうか。

人それぞれに生きてきた環境や歴史がある。どんな経験をして、どのように感性が育てられてきたかで、何かを見つけたことも、何かに気づくことも違っているのは面白い。

また俳句は、物事や自分自身を客観的に突き放して観るところにも魅力がある。

自然に趣味が広がってきている今、その今を大切に日々を送って行きたい。

俳句の眼そして心の眼を働かせて、少しでも磨いていければと願っている。



岡山市民の文芸

石井宏幸

アンタレス上げて浮巢の暮れにけり

去る十一月二十日の第四十三回岡山市民文芸祭において、市長賞をいただき表彰を受けた句である。五百を超える応募句の中での一席であり、大変光栄に思っている。選者の方に感謝申し上げます。

選者の選後評をそのまま抜粋すると、

「アンタレスはさそり座の首星。ひと日を終えた浮巢に夜のとぼりが降りる。浮巢という営巢自体に生存の厳しさが伺われるが、静かに暮れる水面と、妖しく輝く赤色巨星の構図。大自然の織りなす超大作のドラマ、その始まりのひとこま。」

とのことであつた。

大学生の時分から四十六歳で俳句にのめり込むまでへら鮒釣りをし、夜釣りも含めて随分長い時間を水辺で過ごした。その水辺への親しみがこの句の底流となっている。

浮巢を営んでいたのは鳩である。その浮巢からは、闇に沈んでも雛が育まれる生命の気配が伝わってくる。浮巢が闇に沈むのとひき替えのようには、蠍座のアンタレスが夜空に煌めいている。赤色超巨星は星の進化の道筋で言うところの滅びを迎えんとする星で、やがてブラックホールか中性子星になるとされる。赤い星の妖しさは滅びの赤さでもある。

選者の言う超大作のドラマとは、大きな景と小さな景の対比でもあり、生命誕生と滅びの対比、サイクルの違う輪廻の対比ともなっている。

編集後記

- ◆「まるでそっくりだつて」近所の人から聞いたと、笑いながら妻が言う。
- ◆ペットが飼主に似るのは、そもそも手に入れる段階で、自分の好みに合ったペットを選ぶからだ、何かの本に書いてあった。
- ◆だから妻が選んだ犬が私に似ていても、けっして不思議ではないのだが、藪蛇になるので言わなかった。
- ◆寡黙なところなど、確かに似ているとは思ふ。
- ◆それにしても困ったことになった。人生思うようにはならないものである。
- ◆定年間際、それもあと一ヶ月という時期になって、単身赴任をするこ

- ◆愛犬にはまだ言っていない。「しばらくは帰れないから、お散歩には行けないからね」と、いつ言おうかと……。
- ◆悩み多い日々ではある。
- ◆今回も沢山の佳句、秀句をありがとうございました。
- ◆俳句は心の在りようであると、常々思っています。
- ◆心を良い状態に保つことが、良い句を詠む原点なのではないでしょうか。
- ◆私も次号の頃にはもう少し落ち着けるのではないかとと思っています。
- ◆かつては、こんな句を作ったこともありました。

昇進の紙に名はなし揚雲雀

(牛二)

アンソロジー合歓 Vol.8

平成 24 年 2 月 1 日 発行

発 行 合歓の会

発行責任者 富阪宏己

印 刷 弘文社

岡山県津山市

連 絡 先

〒 701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

次号締め切り

平成 24 年 5 月 31 日

原稿送付先

〒 708-0015

岡山県津山市神戸 719-7

渡辺牛二

Email : info@nemunokai.net

Tel. : 090-8710-7067